

あとがき

劉 建輝（国際日本文化研究センター）

2004年、武漢大学教授、馮天瑜氏が『新語探源』（中華書局）という中国近代概念の生成史を扱う新著を携えて来日し、日文研において一年間の共同研究「近代東アジアにおける二字熟語概念の成立に関する総合的研究」を主宰した。時はちょうど鈴木貞美氏が同じ共同研究「出版と学芸ジャンルの編成と再編成——近世から近現代へ」（2003年～2006年）を主宰している最中で、両研究班はいわば姉妹班のような形で、角度こそやや違うものの、近代東アジアの諸概念、またそれに関連する諸学芸ジャンルの成立と編成、再編成等の課題に挑戦した。そして、その間の成果を受けて、2005年8月26日～29日に日文研において国際研究集会「東アジアにおける近代諸概念の成立」を開催した。その意味で、本報告書は形式的には今次の国際研究集会の記録であるが、実質的には両研究班の二年にわたる共同研究の成果も含まれており、その総括の一環でもあるのである。

集会には、日本、中国をはじめ、韓国、台湾、アメリカ、ドイツなどから50数名の研究者が集まり、三日間の日程で24人にご報告いただいた。報告と共に質疑応答等もきわめて盛んに行われ、その時の熱気ぶりが数年経った今もなお昨日のように目に浮かぶほどである。しかし大変な盛会だったにもかかわらず、両班の幹事、また研究集会の責任者である私の怠慢により、報告書が遅延に遅延を重ね、つい今日に至るまで六年以上の歳月が経ってしまったのである。ご報告いただいた先生方、またご参集いただいた皆様に、ここに謹んでお詫び申し上げたいと思う。

六年以上も報告書の編集が遅れたことはきわめて申し訳ないことだが、ただあえて弁解めいたことを申し上げると、この間、私たちは決して今次の研究集会の成果を無意味に放置したのではなかった、というより、むしろさまざまな場において常にこれを活かした形で同課題の追究を続けていたのである。例えばその後に企画された関連の共同研究会、国際シンポジウム等をざっと羅列するとおよそ以下の通りとなる。

共同研究

「近代東アジアにおける知的空間の形成——日中学術概念史の比較的研究」（代表孫江、平成18年度）

「東アジアにおける知的システムの近代的再編成」（代表鈴木貞美、平成19年度～21年度）

「東アジア近現代における知的交流——概念編成を中心に」（代表鈴木貞美、平成22年度～24年度）

国際シンポジウム

「歴史文化概念の再検討（歴史文化語義学）」（武漢大学・日文研共催、2006年12月16日～18日）

「東アジアにおける学芸史の総合的研究の継続的發展のために」(日文研主催、2007年3月23日～25日)

「東アジアにおける近代諸概念の生成と展開」(北京大学・日文研共催、2007年10月16～18日)

「東アジア近代における概念と知の再編成」(日文研主催、2008年11月18日～20日)

「近代東アジアにおける鍵概念——民族、国家、民族主義」(中山大学・日文研共催、2009年11月25日～27日)

「東アジアにおける知的体系の再構築——日本と中国の視座」(南京大学・日文研共催、2010年9月23日～25日)

そして、まだ予定だが、2012年11月に、再度、日文研が同課題の国際研究集会を開催することになっている。2003年4月スタートの共同研究「出版と学芸ジャンルの編成と再編成——近世から近現代へ」、2004年2月10日開催のシンポジウム「日中漢語概念の往還」以来、足掛け十年間の関連研究成果の総括が目的である。

このような展開ができたのは、少し自画自賛になるが、実は少なからぬ本研究集会の成功に負っていると思われる。つまり、まさにここで好スタートを切ったからこそ、一連の問題意識が広く再確認され、その後多くの同志を得た形で今日的な規模を作り上げたのである。その意味でも、この集会は研究史的に大変タイムリーだったと言えるかもしれない。ちなみに、目下、中国、韓国、台湾、ドイツなどでは、一部国家支援のプロジェクトに採用されるまで、同課題の認知度が高く、個々の概念の研究もきわめて盛んに行われている。もちろん、それらのすべてをこの一回の研究集会の影響に帰すことはできないし、そのつもりも毛頭ないが、ただあの時点でこれだけの盛会を開催できたのは主催者としてやはり大いに誇りに思っている。ここでご協力いただいた先生方、関係者の皆様にあらためて深く感謝の意を表したい。

六年以上の歳月が経ち、三日間のあらゆる細部を記憶しているわけではないが、しかし、先ほども触れたように、個々の素晴らしいご報告、熱気あふれる質疑応答が、珍しく今でも鮮明に脳裏に刻まれている。それはこの会議が私にとってどれだけ「衝撃」だったかということの意味しているかもしれない。そしてこの「衝撃」と共に、会場外やエクスカージョン時の楽しい交流、また懇親会場に突然湧き上がった日中大合唱「インターナショナル」の「ハプニング」など、今はそのすべてが大変貴重な思い出となっている。願わくは、本報告書を手にされる諸先生方、関係者の皆様もこの気持ちを共有していただけたらと念じてやまない。